

ハンセン病問題の現在地



会場 & オンライン

「らい予防法」と政策が著しい人権の侵害だったと違憲性を国が認めたのは、2001年だった。現在、全国13カ所の国立と1カ所の私立ハンセン病療養所の入所者（回復者）は、1000人を切り、平均年齢も各園で平均90歳近い。なぜ日本では療養所に囲い込む隔離主義が取られ、偏見、差別が助長されたのか。人権回復の声をあげた人々の闘いは受け継がれて行く。

日程 6月2日（日）開講 全4回 月1回火曜 18:45～20:45（初回のみ別時間）

会場 さっぽろ自由学校「遊」（愛生館ビル5F 501A）ほか ＊オンライン併用

参加費 通し3,000円（単発 第1、2回800円/回 第3、4回1,000円/回 25歳以下500円/回）

6月2日（日）13:30～ 第1回〈公開講座〉

在日朝鮮人とハンセン病

＊会場：かでの2・7 1030 会議室
（札幌市中央区北2西7）

●金 貴粉（きん きぶん）

国立ハンセン病資料館 主任学芸員。現在、在日朝鮮人ハンセン病患者・回復者の歴史、朝鮮書芸史を主な研究テーマとして活動している。著書に『在日朝鮮人とハンセン病』（クレイン、2019年）などがある。



日本のハンセン病療養所にはかつて700名以上の朝鮮人が入所していました。在日朝鮮人のハンセン病発病率が高いのは、この病気が栄養や衛生状態が悪い場所で発病する可能性が高く、植民地支配下において生活水準を低く押し下げられていたためでした。本講演会では、日本のハンセン病政策のもとで生きざるをえなかった朝鮮人入所者たちがどのように生きてこられたのか、個人史もふまえ、考えていきたいと思います。

7月23日（火） 第2回〈公開講座〉

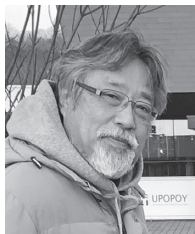
無らい県運動とは何か

―戦時下のハンセン病療養所の実態―

＊会場：札幌エルプラザ 中研修室
（札幌市北区北8西3）

●黒尾 和久（くろお かずひさ）

東京学芸大卒業。専門は考古学。2009年から縁あって国立ハンセン病資料館に学芸員として勤務する。2014年開館の重監房資料館の設立に関わり、重監房跡地の発掘調査に携わる。2018年から同館部長。



木村真三さんの大伯父・仙太郎さんは、1939年9月に愛媛県北宇和郡から長島愛生園に強制収容された。この地域での患者収容は、光田健輔をして、無らい県運動の模範であると絶賛され、小川正子「小島の春」に収載された「土佐の秋」の舞台の隣接地である。ドキュメンタリーは、無らい県運動の「痕跡」を求めて西土佐・南予の地をロケした。この視聴を手がかりに、無らい県運動の暴力と戦時下の療養所の実態を考える機会としたい。

8月27日（火） 第3回

北海道におけるハンセン病問題と家族訴訟

●原 琢磨（はら たくま）

弁護士、ハンセン病家族訴訟北海道弁護団事務局長

ハンセン病を理由として、北海道内から全国各地に強制隔離を受けた方々がいました。その方々の家族は凄惨な差別を受けて、現在もその差別を恐れて声を上げることができません。北海道のハンセン病問題と家族訴訟についてご報告します。

9月24日（火） 第4回

ハンセン病と複合的な差別

―旧優生保護法の違憲性と連なるもの―

●秀嶋 ゆかり（ひでしま ゆかり）

弁護士、ハンセン病市民学会全国交流集会 in 北海道 実行委員会委員長

ハンセン病問題とともに、旧優生保護法下で行われた強制不妊手術等は、戦後最大の人権侵害の1つであり、日本国憲法のもとでも生かされ続けた法律に基づく非人道的な差別である。その実態を、世代を超えて語り継ぎ、差別を解消するために出来ることを一緒に考えたい。

【主催／会場】

NPO法人 さっぽろ自由学校「遊」

〒060-0061 札幌市中央区南1条西5丁目

愛生館ビル5F 501

TEL.011-252-6752 FAX.011-252-6751

<https://sapporoyu.org/>

【講座のお申込方法】

右のQRコードより申込フォームに記入のうえお送りいただくか、以下のアドレス宛に講座名、受講形態（会場／オンライン）、お名前、ご住所、メールアドレスをお知らせください。

moshikomi@sapporoyu.org



会場（対面）
申込QRコード



オンライン
申込QRコード